

集団の中の A さんの変化

1. はじめに

ありのままの生活介護は 35 名のなかまが曜日ごとに違うメンバーが集まり、多い時では 18 名と沢山のなかまが同じ空間で過ごします。大きな集団になるので落ち着かないなかまが多動になったり、大きな声を出して、それに対して怒りだしてしまうなかまや、耐えきれず室内から出て行ってしまいうなかまもいます。その中で、どうしたらいいのかを思考錯誤しながら行ってきただ中で変化の A さんの様子を紹介していきたいと思います。

2. A さんの紹介

- ・ 年齢 55 歳
- ・ 知的障害
- ・ 幼少期から施設に入所され過ごされる。
- ・ 平成 25 年 12 月よりありのまま利用開始、と同時に麦の芽のホームに入居される。
- ・ 家族 父・母・妹

3. A さんの経過と様々な角度で A さんを見てみると・・・。

A さんはありのままに通い始めて、3 年目。毎日、大きな声で泣いたり怒ったりを繰り返しています。そんな A さんにスタッフも、困惑し心に余裕がなくなってしまうこともあり、スタッフでさえ辛い時があるのでなかまたちはもっと辛いのではないかと。また、A さんも大きな声で泣いたり怒ったりすることが辛いのではないかと。何をすれば気がまぎれるか・・・日々の中で A さんの様子を見守っていく中で何がスイッチになるのだろうとスタッフもなかまも試行錯誤しています。

□ なぜ泣いてしまうのか。

- ・ 何もしていなくても、紙切りや漫画を見ていたり音楽を聴いている途中やなかまと世間話をしている途中で突然泣き出してしまふ。
- ・ なかまや自力で動く車椅子のなかまが近くを通るだけで「痛い！」と言って泣き出してしまふ。
- ・ 階段や苦手なものがある時は、怖がり耐えきれなくなると泣き出してしまふ。

□ 困っていること

- ・ 突然、大声で泣いてしまふこと。
- ・ なかまにしつこく挨拶や指切り（ボディタッチ）等を求めること。
- ・ コミュニケーションをとる時の距離感（顔が近い）。
- ・ 何もしていないなかまにたいして「痛い！」と怖がってしまふこと。
- ・ 就労の部屋に入って座り込んで泣いてしまふこと。

□ Aさんの良いところ

- ・ なかまが室内に入ってくると、いつも座る場所を覚えていて椅子をひいて、座りやすくして待ってくれる。
- ・ なかまのお手伝いを気がついたらしてくれる（下膳・チリ捨て等）
- ・ 笑っている時は、なかまたちも大好きで一緒にニコニコ過ごせる A さん。
- ・ 面白い顔をして笑わせてくれる。
- ・ 挨拶をする時は、いつも笑顔で素敵な挨拶をしてくれる。
- ・ 指切りがなかまの間でちょっとだけブーム。
- ・ 歌も上手で、リズムをとるのがとっても上手。時にはみんなの中心になり歌を歌ってムードメーカーになってくれる。

□Aさんの苦手

- ・ 階段・大きな車に乗ること。
- ・ 大きな集団になると、そわそわ・うろうろしてしまう。
- ・ 就労 B の B さん（以前怒られて体を押されて以来苦手）の声。

□ Aさんができるようになったこと。

- ・ なかまの名前・スタッフの名前を覚えること。
- ・ お出かけの時のバスへの乗り降り。（大きな車に乗れないわけではない。）
- ・ みんなと一緒に空間に入れるようになった。
- ・ 以前はソファで一人で活動していましたが、みんなの輪に入ることができるようになりました。

4. Aさんの様子と変化

週5日ありのままを利用する A さん。「私が、A さんを慰めなくちゃ！」と思うなかま、「うるさいからどこか行って！」と怒るなかま、何も言わないけど、A さんに対して心を閉ざしてしまっているなかま。いろいろななかまがいます。泣いてしまった時、声かけに対してすぐ泣き止む時もあるれば、泣き止まずひどくなる時もあります。「A さん泣く時はみんな悲しいね。」とスタッフがいうと「違う。」「いけない」「ごめんね」と言って落ち着いてくれる時もあります。そんな時はスタッフが「だよね。違ったね。間違えたね。」と言って、励まし、いけないことはきちんと説明しています。泣く回数が頻繁な時はメリハリをつけるためにしっかりと注意する事もあります。落ち着かなくてどうしようもできない時は、廊下に出て話をして落ち着いてから室内に入るようにしたり、気分転換に散歩に行くことで周りのなかま達も、ありのままの空間でホッとできる瞬間を作れるようにしています。散歩に行った時は、とても落ち着いていて「お花」「自動車」と色々なものに興味を示し指さしをします。ボール遊びは大好きで一緒に散歩に行くなかまと仲良く遊ぶことができ、体を動かすことで発散することができるため、その後はとても落ちついていきます。頭を撫でる行為、なかまに撫でさせて少々しつこい時もあり、注意すると「いいの！」と A さんから返事が返ってきますが「○さんは嫌そうな顔をしてるよ。」とスタッフの声

かけにも「良いの」と言って続けることがあるので介入が必要なときもあり、Aさんがしたいことを否定されることも苦手なようでその日の調子によっては泣き出してしまいうことがあります。そんな時はなかまもスタッフもお手上げ状態になってしまいがちですが、Aさんがちゃんと話が聞けるようになるまで声掛けをし、聞けるようになったら「Aさんがこんなとき、こうだったら嬉しいかな？」とAさんに尋ねると「いや、いけない」ときちんと分かってくれてその時は泣き止んでくれます。

5. 他のなかまとAさんとのやりとりや事例から

Cさん→「うるさいから、ありのまま、やめたい。」と話すなかま。

でも、Aさんが落ち着いている時は一緒に散歩やメニュー聞きに行ってくれる。

Eさん→何も言わないが、とても嫌そうな顔をする。

Eさんが落ち着ける場所の確保、座る場所の移動等してゆっくりと過ごせるように配慮しています。無理にはAさんとの関係を引き戻そうとはせず、Aさんが変わることでEさんもAさんの見方が変わってくると思います。

Dさん→「静かにして！もう嫌！」と言って生活介護の部屋から出て行ってしまふ。

DさんがAさんに強い口調で注意をすることで、また泣き出してしまふこともあるのでDさんの気持ちも受け入れながら説明をしています。

□ ありのままに通所し始めは、大きな集団に入っても大きな声で泣き出すことが多く、生活介護の空間で過ごす事が難しく人数の少ない就労Bの部屋で過ごすようになりました。生活介護の空間も少しずつ慣れてもらうように、1~2名の生活介護のなかまと一緒に就労の部屋で一緒に活動を始め、それから少しずつ生活介護の部屋で1時間過ごせるようになり、半日過ごせるようになり、いつの間にか1日生活介護の空間で過ごせるようになりました。以前は泣き出すと、止まらず室外に出てもらふことも度々ありましたが、今は時々情緒不安定になって落ち着かない日もありますが、前程、頻繁ではなくなりました。

6. これからAさんと一緒に取り組んで聞くこと（新しい経験を積み重ねていく）

- ・ 車に乗れるようになること。
- ・ 泣いてしまふこともあっても良いけど、泣くことが減って違ふことでAさんを表現できるようになってほしい。

Aさんの泣き声に嫌な顔をするなかまも多いがAさんが落ち着いているときは、みんなでボール遊びをしたり一緒に歌を歌ったり、輪の中心になれるので泣く事は悪い事ではないけれど、Aさんらしく、自分を少しでも違ふ形で表現できるようになれば良いと思います。また、周りのなかまも、Aさんが泣く時は苦手だけど、一緒に散歩に行ったり歌を歌ったり楽しく活動することができているので、それをうまく生かしてAさんのことをもっと知る機会を作っていこうと思います。Aさんが笑っている時の顔・声、まわりのみんなを幸せにしてくれます。

～作業実践から見えてきたなかまの役割づくりの意味を考える～

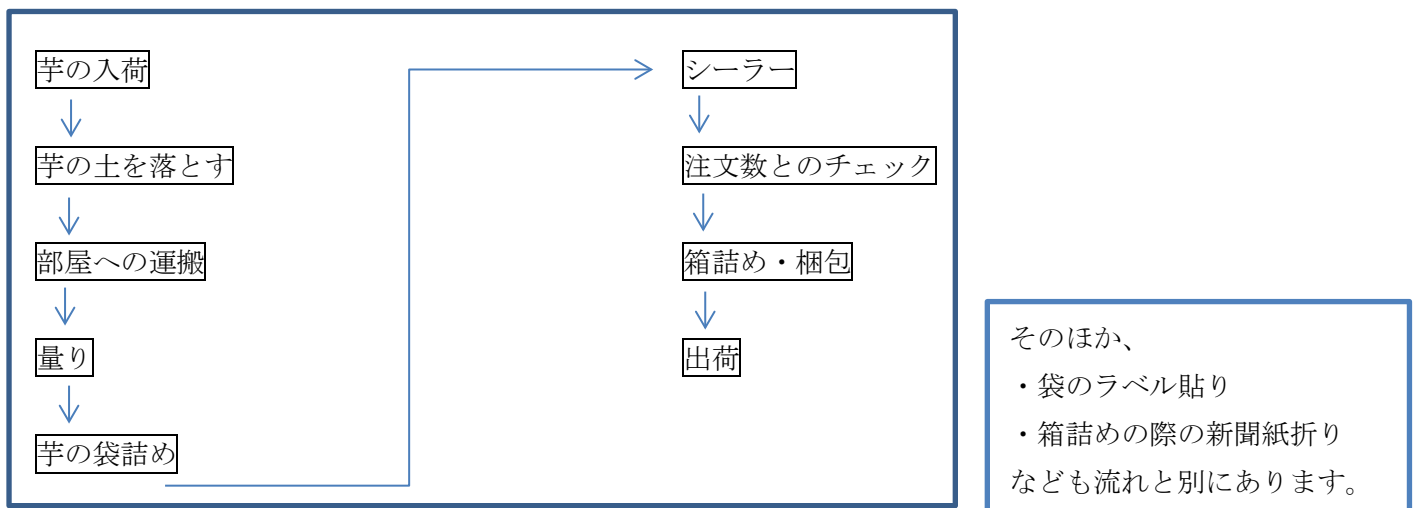
1.はじめに

いきいきセンターでは毎年春闘を実施し、作業・給料・日課・送迎等の項目でなかま達から困っていることや不安に思っていること、嬉しかったことなどを聞くようにしています。そのなかで 26 年度、「(作業に関して)やりがいを感じられない」、「もっと作業したい」、「誰かの役に立ちたい」、「お給料がもっといっぱいほしい」、「お給料をこれ以上減らさないで欲しい」という声が挙がってきました。(お給料はたくさんほしいが、収入がなく給料を上げられない、それどころか赤字続きで算定方式の見直しを行い、お給料の引き下げをしなければならない) という事態になっていました。なかまたちとどうしたら収入につながる商品が作れるか、みんなが取り組めるもので、なおかつやりがいも感じられる作業とは? と話し合う中で、新しい作業ができないかという声が出てきました。

そんな中昨年度は、「ヤクルト作業」「安納芋のパッケージ作業」という新たな作業を始めてみることにしました。「ヤクルト作業」は、1つの班が中心となって作業することになり、「安納芋の袋詰め作業」はあえて担当班を決めず、みんなで取り組める作業としました。今回は、芋の作業で感じたなかまの役割作りについて考えてみました。

2.新しい作業実践とその問題点

安納芋袋詰め作業の主な流れは以下の通りです。



たくさんの流れがあって、役割もあってお給料にもつながる作業ですが、やっていく中で少しずつ問題点も見えてきました。

① 作業場所

土の付いた芋を置いておく所、中心となって作業する場所となると、汚れもすごく、狭く、作業となりづらい状況もあり、作業をスムーズに行える場所が現状ありませんでした。

② なかま同士の関係性

これまで班が違えば一緒に作業することも少なく、関わりがなかったため、相性が合わないなかまもいて、顔を合わせて一緒に作業することで、トラブルが発生することもあり、またその声に反応して泣き出してしまうなかまもいました。

③ 土落とし作業による肌への負担

肌の弱いなかまやアレルギーのなかまなど、土作業後にかゆみを訴えるなかまが出てきました。軍手やゴム手袋などで対応していたのですが、それにもかゆみが出るなかまがいました。

④ 天候の問題

土落としは汚れやほこりが部屋中に舞うため、外での作業でした。夏から秋は日差しが暑く、日陰にいても熱中症の心配がありクーラーの効いた部屋に行きたいという声もよく聞かれました。冬は風が冷たく体が冷え、風邪の原因になります。他にも雨の日はなかまも芋も濡れてしまうので、スタッフだけの作業となってしまう、なかまが主体的に作業できない、なかまが置いて行かれるという状態でした。

⑤ 作業理解

作業工程が多く流れが理解しづらい、作業全体が把握しづらくなかまもいました。今自分のやっている作業にどんな意味があるのかわからず、作業拒否するなかまもいました。

新しい作業に慣れるのにも大変な中で、問題も浮き彫りになり、積極的にやりたい！やってみよう！というなかまは少ない状況でした。物販などの時期と重なったこともあり同時進行で作業を進めなくてはならず、スタッフもバタバタしていたので、なかまたちはより一層不安に感じていたのだと思います。

3.スタッフ間で大事にしてきたこと

① 作業スペースの見直し

もともと違う作業をしていた場所を、期間限定で芋作業の部屋とし作業のグッズや土を落とした後の芋の置き場にしました。ほこりの問題もあるので、午前中はその部屋でパッケージ作業を行い、午後からはみんなで取り組めるように食堂で作業することにしました。

② 土落とし器「静香ちゃん」の作成

部屋でもほこりや汚れの舞いを気にせず土落としができるように、木工が得意なスタッフが土落とし器を作成しました。暑かったり寒かったりで、外での作業が億劫になっていましたが、この器械のおかげで部屋の中で作業できるようになりました。(ちなみに、「静香ちゃん」というのはなかまが命名してくれました)

またスタッフ会議のなかで、土落としが出来ないと作業にならないこと、静香ちゃんを使っても出来る人が決まってしまうスタッフが代わりに土落としを行い、なかまが置き去りの現状がまだあることを共有し、なかまが帰った後の1時間、みんなで集まって土落としを行うことにしました。

③ なかま・スタッフの体制作り

有難いことに作業が開始して1か月ほどたつと、注文数も倍近くに増えていました。これまでは1つの班が中心となって作業していましたが、それでは追いつかなくなってきていま

した。そのため全班が関われるように、朝礼の際にその日の受注数を確認し数に応じて、だれが関わるかの体制も大まかに立てることにしました。体制を厚くすることで、なかま同士のトラブルも減らすことができたように感じます。

④ なかまの役割分担

作業把握が分かりづらいなかまには、工程すべてを1度体験してもらい、その中で本人の出来る作業、やりやすい作業をしてもらうことにしました。またアレルギーのあるなかまには、芋を触らずに済む箱詰め・梱包や数のチェック、袋のシール貼りなどをしてもらい、緊張が強く細かい作業の難しいなかまには、〇〇運送(〇〇は本人の名前)と命名して土を落とした芋を部屋から部屋へ運ぶ作業をしてもらいました。〇〇運送は、段ボール箱に名前を書いただけのスタッフが冗談で行った実践だったのですが、本人にとっては役割の実感できる実践でした。

4.作業を開始してみても

きついこと・つらいことを挙げるときりがなく、スタッフ間でも難しい作業なのかも…、お断りした方がいいのかも…と考えていました。しかし1年経過し昨年度のなかま春闘で出てきたのは、「芋作業頑張った」「来年度も続けていきたい」「みんなで協力してできる作業っていいなあ」「芋作業頑張ったから、今月の作業会計は黒字だったね」という声でした。他の班のなかまと一緒に作業できることの楽しさや喜び、なかま同士のつながりを実感し、これまで仕事を作りきれなかったなかまが自分の役割を感じられたようです。また、頑張った作業がお金になる(目に見える形で評価される)ことでやりがいに繋がったようです。

5.さいごに

今回新しい作業を実践する中で、なかまにとっての「役割」の大切さを改めて感じました。それは、時にはこちらから仕掛けていくことも必要ですが、なかま同士の協力した実践の中で生まれていくことも大事でそこでできた役割がなかまにとってのやりがいに繋がると感じました。

今年度も始まり、新たに別の野菜の袋詰め作業が入ってきました。またこれまでやったことのない作業も始まってきます。不安になるなかまもいるかもしれないし、やりたくないというなかまも出てくるかもしれません。これからは、なかまの役割をどうしていくか、他のなかまを感じながら出来る実践とは？というのを考えながら実践できたらいいと思います。

すばる

変わり始めたAさんとBさん

■はじめに

すばるには主に知的障がいのがなかまが三二名います。その中で、昨年レポートにも登場したAさんとBさんとの現在、お互いに苦手意識を持っていた二人の距離感が変わってきたこと、またその過程について紹介していきたいと思えます。

■Aさん 四十六歳 知的障がい(B-1)

小・中・高と、地域の支援学校に通っていました。高校一年の一学期に退学。母親と二人暮らしをしていたAさんは、母親が仕事に出ている二十五年間、日中を一人で過ごすことがほとんどだったようです。すばるに来るようになり七年、優しく、楽しいことが好きなAさんですが、初めの頃は不安や戸惑いもあったのでしゅう、その気持ちを言葉にすることが難しく、様子がおかしいな〜と思ってスタッフが声をかけても苦笑いをしながら「いや〜。大丈夫〜」しか答えられず、本人の不安や気になることを言葉で表現できず、それがピークに達すると大声で怒鳴

ったり、物に当たったりすることがありました。また、以前トラブルのあったBさんはAさんにとって苦手な存在となっていて、声を聞いただけ、目に入ってきただけでも以前のトラブルを思い出ししまい、大きく気持ちが崩れてしまうことがありました。それが、だんだん信頼できるスタッフや、支えとなってくれるなかまの存在が出来るようになっていく中で、現在は、少しずつ気持ちを吐き出せるようになったり、何か考え事などある時には、散歩に出かけて、本人なりに気持ちの整理や調整をしているような姿も見られ、大きく気持ちが崩れるようなことも少なくなってきました。

■Bさん 三十二歳 知的障がい(A-2)

Bさんは、Aさんと同じ班です。BさんもAさん同様苦手な存在となっています。Bさんは、集団での活動がなかなか難しいところもあったり、お互いに意識し合っていることから、二人が同じ空間での作業とはならず、作業は主にスタッフとのマンツーマンで取り組んでいます。普段はひょうきんで、楽しいこと・人が大好きなBさんですが、他のなかまのトラブル、またAさんの怒鳴り声などには敏感で、怒っているAさんを見て、『怖い』と感じていました。そんなことからAさんが怒り出すと、その怖さから逃れたいがために更に大声でBさんも怒り出す、

というような場面がこれまで何度も見られてきたり、日常的にもAさんを意識してAさんの動きをひたすら目で追ったり(Aさんにとってはこれが苛立ちの原因となったりすることも…)、「Aさんが怖い」と言って外に出たりすることもありました。そんな中でも「Aさんと仲良くなりたい」とBさんは話していました。しかし、そんなBさんの声を聞きながらも「あの二人が仲良くなれる日がくるんだろうか…(いや、難しいだろうな…)」と私は思っていました。

■二人の関係性の変化・きっかけ

これまで、ふたりがぶつかり合う度に、なぜAさん、またはBさんが怒っていたのか、お互いが不安に思っていたこと、怒りの原因は何だったのか等…それぞれが信頼できる、話しやすいスタッフと丁寧に振り返ることを何度も続けてきました。「なんで怒ったの?」と聞いても、その『なんで』が分からないからイライラ・怒りに繋がってしまっ…、そんな言葉で表現できない彼らと向き合いながら、私たちスタッフもどうしてあげたら良いのか分からない時もありました。ある時から、Bさんが「Aさん、おはよう!」「Aさん、いってらっしゃい!」と自分から声をかけるようになりました。これまで目が合えば、口を開けば何かが起こる…そんな二人

でしたのでAさんとしてはBさんからの声掛けに「えっ？どうして？いつものBさんじゃない」と、戸惑いしかなかったと思います。Bさんからの挨拶には下を向いて「はははあ〜」と苦笑いを返すだけのAさんでした。一方で、やっとの思いでAさんに声をかけることができるようになったBさんは、とっても嬉しくて、自然と顔もにやけちゃう…♪そんな感じに見えました。 さて、二人が急接近することとなったきっかけは何だったのか？さかのぼります。

これまでの振り返りの中で、「あの時、Aさん（Bさん）はこんな気持ちだったんだよ」と怒った理由を伝えたり、「でも、嫌な気持ちだったよね」「大層は怖かったよね」と二人の不安な気持ちにも共感しながら、「でも、本当は仲良くしたいと思っているんだよ」と、お互いに相手の気持ちも伝えるようにしてきました。そうしていく中での変化だったのでしょうか。るんるん大学に属しているAさんが、すばるで夕食を済ませ、ヘルパーさんの迎えを待っている日のことでした。たまたま事務所に来ていたBさん、スタッフとたわいもない会話をしながら、そろそろAさんのヘルパーさんがお迎えに来る時間、Aさんの様子が気になるBさんは、張り紙がしてある事務所の窓の隙間からジッとAさんのことを見ていました。そんなBさんに、「Aさんと仲良くならたいっ？」と私は改めて聞いてみました。「ま

あね」とBさん。Aさんのお迎えが来ました。「本当はお見送りたいけど…」そんな風に言われたわけではないですが、なんとなくモジモジしているようなBさんの背中を見ながらそんな風に言われた気がして（勝手な思い違いかもしれませんが…）、「Aさんに行ってらっしゃい！行って言っておいでよ」「Aさんと言いました。するん、Bさんは「待ってましたー」と言わんばかりのテンションで「うん！」と立ち上がり、るんるん大学に向かうAさんに「Aさん、行ってらっしゃい！バイバイ。」と声をかけたのです。私としては「いや、やめとく。」と、否定的言葉が返ってくるかもなあと思っていたので、Bさんの勢いある行動に驚かされました。そんなBさんの様子を見ながら「Aさんと関わるためのきっかけが、ずっと欲しかったんだろっだなあ」と感じたりもしました。しかし、BさんがAさんを思う気持ちとは裏腹に、Aさんのリアクションはいまいち…、自分のした声掛けが間違っていたかな…そう感じさせられることもありましたが、次第にAさんの気持ちにも変化が見られるようになってきました。「Bさんが『おはよう』って言ってきたよ」とスタッフに報告したり、「おはよう」「バイバイ」って返したり（まだまだBさんの顔を見て…とはなりません）することが増えてきました。Aさんの顔が引きつっているような時もありますが、同じ空間にいる時間も少しずつ増えてきました。

■現在の『ふたり』

お互いに挨拶を交わせるようになった二人ですが、まだまだ不安定な関係です。日々のBさんの高いテンションにAさんが苛立ったり、グループ活動時、Aさんも同じ活動グループであることが分かれると「Aさんがいるから僕は行かない」というBさんの姿があったり、二人の関係とともに気持ちも日々いろいろ、「こちゃこちゃ？変化しているようです。スタッフの「仲良くなってくれたら…」」の勝手な願いに、二人は無理して応えようとしてくれているんじゃないか…？と、考えることもあります。そんな中で、お互いがお互いを感じている気持ちを再確認できるような出来事がありました。土曜日の余暇活動で野球観戦に行った日、風食に買ったお弁当をAさんが食べきれず、スタッフにあげたのですが、そのおかずをBさんにも「Aさんからだよ」と言って分けてあげたのです。BさんはAさんに「Aさん、ありがとっ」、Aさんは照れくさそうにしながらBさんに「いいよっ」、そんなやりとりがありました。いたって普通のやりとりのように思えますが、彼らにとっては特別嬉しいことだったようで、Bさんはこの出来事をお母さんにも報告していたのでした。

■『これからの』『ふたり』 ～こじりなったらいいな～

以前の二人からは想像もできないくらい、お互いの距離はぐっと近づき、関係が変わってきました。二人を見ながら『(まだちょっと怖いけど)もっと仲良くお喋りしたいよ』『一緒に楽しいことしてみたいよ』というふうになっているんじゃないかな?と感じられる場面もあります。Bさんに関しては、以前は1対1でないと自分を出せなかったのに、信頼できるスタッフ、そんなスタッフが間に入りながらのAさんとの関わりを通していく中で、集団生活の心地よさを感じられるようになってきており、みんなと作業を楽しむことも出来るようになってきました。今の彼らの状況を本人たちはどう感じているのか?、これから私たちスタッフにできることは何か?考えたりますが、そう簡単に答えが出ることはないので、まずはひたすら見守っていただけたいのかな、と思っています。まだまだ苦手で?受け入れられない?ところがお互いにある二人が、今後どうやって折り合いをつけながら今の関係を展開させていくのか...、興味がありますし楽しみです。

■わらわら

なかま達と関わる中で、教わること、学ぶことがたくさんあります。今回、AさんとBさんの様子を客観的に観察しながら、自分自身がどうやって人とつながってきたのか、つながっていくことの心地よさを改めて思い出すきっかけになりました。二人の関係の変化を一步前進と呼んでいいのか?は分かりませんが、彼らとの日々の関わりの中で『変わっていく姿』を見られることは、とてもハッピーなことですし、それがこの仕事の醍醐味ではないかな、と私は思います。今後のふたりについては、まだ数年後、ご報告できる機会があれば嬉しいな、と思います。

「地域や なかまと共に生きる」

2012 年に、発達相談で甕島を定期的に訪問していた福元さんが「甕島に住んでいる障害がある人達に福祉の手が届いていない」という保健師さんからの訴えを聞き、甕島に作業所を作ろうという話しが持ち上がりました。

障害者福祉施設が全くない甕島では、働ける場所がないからと一日中 家から出ずにずっと 1 人で過ごしていた人や、手帳も取得せずに 80 歳を過ぎた母親の年金で暮らしている人達がいるという実態がありました。

昨年 3 月、4 月、5 月と、月に 1、2 回 甕島に行き、作業所として使える物件探し、職員探し、申請の手続きをすすめました。

島には空き家が多くありますが、家具などを置いたままで島を出ている家がほとんどで、なかなか貸して頂ける家がありません。支所の職員さんや島の畳店さんの協力で、作業所に使えるような空家を紹介していただき、無料で貸していただけることが決まりました。長年住んでいなかったというその家は、庭は雑草などで荒れ放題、家の中も掃除にはかなり時間がかかるだろうという状態でしたが、それでも作業所の場所が決まり、やっとスタートできると嬉しくなりました。

この頃、作業所の名前をどうしようかという話しが出てきました。

作業所が建つ場所は、島同士を結ぶ砂州が成長して陸続きになった、全国的にもめずらしいトンボロ地形の真ん中にあります。このトンボロから新しい風を吹かせよう、また、地域の皆様とつながるという意味で共同をつけ、「共同作業所トンボロの風」と決まりました。

スタッフは私を含め 3 名必要でしたが、島でどうやって探したらいいのか。

支所の職員さんと、家を紹介してくださったお隣りの畳店さんに相談すると周りに声をかけてくださり、畳店さんの従業員の奥さんと、春に島に赴任して来た小学校の校長先生の奥さんを紹介してくださいました。

男性スタッフもほしいと思っていたところ、甕島出身の麦の芽スタッフさんから、甕島で生まれ育った 30 代男性を紹介していただき、全員とても魅力的な人達だったため、女性は週 2、3 日の交代の勤務体制で、3 名とも採用することになりました。

この時点で、1 年ほど前から甕島に月に 1 回訪問していた基幹相談支援センターの紹介で、作業所ができしだい利用したいというなかまが 3 名おり、7 月の開所をめざし、6 月からなかまとスタッフで、作業所の掃除を始めました。みんな汗だくになり、埃まみれになりながら、2 週間ほどかけて家じゅうを掃除しました。この経験で、知り合ったばかりのスタッフ同士の絆も深まった気がします。

次にやらなければならないことは、家具をそろえることでしたが、これも支所の職員さんや近所の方々

に声をかけたところ、長テーブルとパイプ椅子、タンスや掃除機がそろいました。事務机は、下甕島の人がくださることになり、漁船で運んでいただきました。

6月中に、里地区にある主な会社全てを訪問してあいさつをしました。

すると「あの人にも会っておいた方がいい」と紹介していただいたり、「こんな作業はお願いできるだろうか」と話しをいただくようになりました。

このことがきっかけで、甕島のお豆腐屋さんの瓶詰のラベルシール貼りや、観光物産協会の主任さんから、里港ターミナルを毎日お掃除するお仕事も、開所する前に決まりました。

ある日、私が住んでいる地区にある民宿のご主人から「あなたに会いたがっている人達がいる。あなたを招いて食事会をするから来て」と言われ、当日に行くとそこに集まった5人の方々が「私達は、里でがんばっている女性を応援する会を結成したから、困ったことがあればボランティアで駆けつけるから何でも言いなさい」と言っていました。

作業所の敷地内の荒れ果てた畑を何とかしたいと思っていたので、すぐに協力してほしいと伝えました。昔は桑の木を植えていたという畑は、木の根がはっていたし、大きい石がゴロゴロしていたので、私達スタッフやなかまだけではどうにもならないと悩んでいたところでした。

その週末、すぐに集まってくださり、ダンプや重機を敷地内に入れるためにブロック塀を壊したり、畑に入れる赤土を山から何度も運び、想像していた以上の大工事になりました。

ボランティアの方々がさらに仲間を呼んで人が増え、どんどん作業が進んでいきました。近所の人達も集まってきて手伝ってくださったり、差し入れをしていただきました。

たった2日の工事で、畑も駐車スペースもでき、作業所の前の敷地は見違えるように変わりました。

開所したらすぐに、お仕事を探していることと、生地などの創作活動に必要な物品を探していることを書いた、チラシを配ることにしました。

甕島出身の中村専務から、チラシに「世話役」を数人記載すれば、島の人達も安心して協力してくれるというアドバイスをいただき、中村専務のお父様や、虹のセンター親の会の小川カヲルさんなどのお名前を載せていただくことにしました。

7月1日の開所後は、なかまたちと一緒に、里地区の約600軒近くにチラシを配りました。そのおかげで、創作活動に使うミシンや生地などが少しずつ集まってきました。

保健師さんや、社会福祉協議会の方々が、個人宅のお掃除などもするというのを伝えると協力してくださり、ひとり暮らしや、動く事が不自由な老人宅の掃除のお仕事を紹介してくださるようになりました。

ボランティアの方々に作っていただいた畑は、世話役の一人から「玉ねぎの苗を作って出荷すれば工賃になる。種は買ってあるから」という話しをいただき、その日のうちに畑を耕し、うねの溝にまいて

いきました。

数週間で畑が青々としてきたので、1本6円で苗を販売するという看板を作業所前のブロック塀に貼りました。チラシをお店や港などに配り、フェイスブックでも告知すると、あっという間に1万本近い注文が入りました。

この頃から、同じように玉ねぎの苗を販売している人の様子が今までと少し違うかも、と感じるようになり、畑の使い方に対しても、近所の人から良く思われていないようだと言われるようになりました。

ボランティアで畑を作ってくれた方々が、玉ねぎ苗を育てるようアドバイスしてくださった世話役さんのことを、あまりよく思っていないということを以前から聞いていたので、種を植えた日にすぐにボランティアの方々に事情を伝え、玉ねぎの苗を育てて販売することを説明してまわりました。その後も定期的に、協力者の皆様の各家を訪問し、作業所の状況を報告して、それぞれと良い関係を築けているつもりでいます。

しかし今回のことで、内情を知らない周りでは「ボランティアの人達がんばって作った畑で、何もしていない世話役がいきなり畑を使い始めた。ボランティアの人たちがかわいそうだ」と言っている人たちがいたようです。

小さな地域では、ちょっとしたことが噂になったり、間違った情報が流れてしまいます。配慮が必要だったと痛感した出来事でした。

玉ねぎの苗は、15000本を出荷しました。なかまの工賃は増え、今まで作業所ができたことを知らなかった人達とも交流ができ、そこから新たなお仕事も増えているので、結果的に大成功でした。

ただ、協力者の方々の間にわだかまりがある気がしていたので、みんなでお話する機会を作りたいと思い、忘年会を企画しました。世話役とボランティアの方々に招待状を持っていったところ、全員が出席すると言ってくださり、なかまとスタッフ合せて出席者20名の忘年会になりました。畑で作った白菜や、いただいた大根、里芋、ネギなどの野菜で、みんなでよせ鍋や芋煮を作りました。招待客の皆様が、カンパチやキビナゴのお刺身、巻き寿司などを持ち寄ってくださり、豪華な忘年会になりました。

地域の方々となかまたちと一緒に過ごし、会話をし、あたたかい時間になりました。

現在、なかまのお仕事は、里港ターミナルの清掃を毎日しています。他に個人宅の清掃や草取り、瓶のラベルシール貼り、畑仕事、創作活動をしています。

今まで働いた経験がなかった50代の知的障害の女性は、常に不安をかかえ、眠れない日も多く顔色も悪かったのですが、家以外の自分の居場所ができたことが幸せだと言い、眠れないということがなくなったようです。初めて工賃を渡した時には、生まれて初めて自分で稼いだお金がとても嬉しかったようで、涙を流しました。帰ってすぐに仏壇にそなえ、母親と一緒にまた泣いたそうです。

開所当初は、周りの人達に見られるのが嫌で、外の仕事には絶対に行きたくないと決めていた身体障害の男性は、2ヶ月ほどたった頃から毎日里港の掃除に行っています。その方は若い頃に自動車整備士をしていたようで、時々、その頃の作業着だったツナギを着てきます。初めて作業所に着てきた時、スタッフみんなで「かっこいいね」と言うと「10年ぶりに着た」と笑顔を見せてくれました。

高次脳機能障害の男性は、最初はなかなか作業所にいることができず、家に帰りたがっていたのですが、最近では作業所が仕事をする場所と思えてきているのか、少しずつ作業所にいる時間が長くなってきています。作業所ができるまで、ずっと付きっきりだった奥さんは、短い時間ですがパートに出る事ができるようになりました。その状況を知っている近所の方々からは「作業所ができたおかげだね、ありがとうね」と言われる事が多くなりました。

その他にも、いろいろな場所で、なかまたちの顔つきが変わったとか、歩き方が変わったと言われます。地域の人達が、なかまたちの変化を感じているようです。

私も含め、トンボロの風のスタッフ全員、福祉関係の仕事に就いた事はありませんでしたが、毎日なかまたちと過ごし、一緒に仕事をするうちに、なかまの変化に気づき、その変化をみんなで喜べる関係が築けるようになってきました。

障害の特性や接し方がわからなければ、福元さんをはじめ、デイハウスびいのスタッフに電話して聞き、対応しています。

麦の芽の各事業所からも、ボランティアでお手伝いに行きたいとか、甕島の商品を物販したいなど、応援していただいているのを感じ、少し離れた離島ですが、とても心強く思っています。

作業所が建つ里地区では、だいぶトンボロの風のことが広まったように思いますが、山を越えた上甕地区では、まだまだ作業所とはどういうところなのかを知らない人や、利用者側がお金を払って障害者を預かってもらう場所という間違った認識を持っている人達も多くいらっしゃいます。

今後、どのようにして広めていくか、なかまをどうやって増やしていくかを考えていく必要があります。

年末に、里地区で商店を営む女性から、話しがあるのと呼ばれました。

50代のその女性の母親は認知症で、島外にいる甥っ子は自閉症だそうです。

その女性は、甕島で生まれ育ち「私はこの甕島を、里を愛しているの！」と私に何度も言いました。この愛している里で、母親と一緒に暮らしていきたいし、母親もそう望んでいるそうです。

障害がある人や、今後さらに増えて行く老人の居場所を、一緒に作っていきましょうと語り合いました。

今年になり里地区のしばらく使われていなかった段々畑を整地し、かのこユリやラベンダー、ひまわりの苗を植えてはじめています。何年かかるかわかりませんが、いつか見渡す限りの花畑と海を眺められる建物を作り、老人も子供も楽しめる場所を作ろうというプロジェクト「花実咲」が動き出しました。トンボロの風のなかまたちは、草を取ったり、島外から来てくれるボランティアさん達が泊まる家の掃除や管理のお手伝いをさせていただいています。

甕島で生まれ育った人でも、何か新しい事を始めようとする、周りからの批判や、同意を得られなくて悔しい思いをしてきたそうです。「それでも誰かがやらないと、島はどんどん廃れて行くでしょ。だ

から私達がやらないと！」と、その女性は言っていました。

この話しを、作業所の畑を作ってくれたボランティアの方々に話したところ、一緒に手伝うと言ってくださいました。

どんどん輪が広がっていくのを感じて、嬉しくなりました。

麦の芽福社会のめざすものにある、「地域に開かれ、地域に支えられた施設」に少しずつ近づいているようです。

甌島の人達に、共同作業所トンボロの風が根づくよう活動したいと思っています。

「問題行動」を起こすKさんに寄り添う

1. はじめに

びいには、びいの開所時間 7:00~19:00 よりも長くびいにいる K さんがいます。高等部を卒業してびいに来はじめ、今年で 8 年目になります。「飛び出し」「地域の車への無断乗り込み」など気持ちが落ち着かないと「問題行動」を起こす K さんが落ち着いて過ごせるにはどうすればよいかを考え、とりくんでいることを報告します。

2. K さんの生育歴

K さんは、現在 25 歳

療育手帳 A1 知的障がい

小中学校はサポートセンターういるを利用しながら養護学校へ

高等部から寄宿舎を利用して週末にばるを利用

高等部卒業後 18 歳でびいへ

当時は父実家で本人家族(父、本人、妹) おば家族、祖父との同居

幼少期の頃よりてんかん発作があり、びいに来た当初、自宅での入浴時に発作があり、そのため毎日発作の薬を服用している。

単語でのコミュニケーションのため相手が言葉の意味を汲み取りにくく、互いに思いが伝わりにくいことでスタッフが補足する必要があったため、他者(特になかま)へ話しかけることが苦手。

常に 1 対 1 の状態で見守りが必要で不安な状況が続き、相手の話を聞いたり、落ちついて過ごせる日はごく稀でした。

3. これまでの「問題行動」としてとらえられている行動

・自宅から飛び出し行方不明になったり、バスに乗り込み無銭乗車をし、バスが自分の思い通りの所へ行かないとドライバーさんの帽子を窓から投げ捨てたり。

・近くに葬儀社があり、本所を飛び出し軽トラに乗り込んでカギを閉めエンジンをかけ車を動かそうとする。また一度飛び出し行為が始まると 1~2 ヶ月ほど不穏な様子が続く。

・近くの生協コープへ行き陳列してあるパンを食べる。

・病院へ入り込み点滴を抜こうとする(未遂)

・制止するスタッフ、付き添うスタッフのメガネや物を壊そうとしたり時には暴れる

・行方不明になり捜索しても探しきれず警察へ通報、警察へは車に乗り込んだりの不適切行動を地域住民から通報され、身柄引き取りに向かうこともしばしば、地域の方々にも迷惑をかけ、そのつど所長をはじめスタッフは何度も謝罪にでかける。

など「困った」こと、「問題行動」は多数でした。

4. どうして「問題行動」に走るのか

度重なる「問題行動」にスタッフが疲弊する場面があり、「問題行動」を解決するにはどうしてその行動に走るのかを知る必要があるのではと、話し合いや語り合いを重ねました。

・幼少期より十分にかまってもらえず、愛情を感じられる場面が少なかった所以他者の愛情を感じられずスタッフを試す不適切行動に走ったのではないか。

・自分の思い通りにならないことや自分の思い通りにさせようとする事で、飛び出し行動や依存傾向な他者とのかかわりがある。

・自宅での満たされない思いや家族(特に父)との関係で抑圧されており、父親の前でその気持ちを発散できず本所で行動に走る。

・適切な対人関係を作ることが難しく（対人依存があり）特に新規のスタッフがくると自分本位な関係にしようと注意喚起のために「問題行動」をしたり、依存的な関係になると追い回しや特定スタッフが休みの際に「問題行動」をおこすことが多くあった。

5. かかわりの変化

以前はほめられたい、認めてもらいたい対象はスタッフしかいませんでした。そんななか旅行の担当をしたり、仕事をしていくなかでなかまたちのなかで過ごす場面やなかまとかかわる場面を意図的に増やしていきました。

① 仕事について

本人が好んで活動としてビーズ作業がありました。

「仕事をする」と褒められる」ことから必ず仕事をしたことのアピールがありました。もちろん本人のやる気につながり良いことではありますが、「アピールするために仕事をする」と手段が逆転していました。これはスタッフによって自分の仕事を変えることから明白でしたし、本人も何故その仕事に行くのかを聞くとスタッフの名前を呼びそのスタッフがいるからだと伝えてきました。目的はスタッフへついていくことなので、仕事もおごなりな所が多くなりました。

上記については、スタッフ間で共有し、特定のスタッフへついて行くのをスタッフが断り残るスタッフがフォローしていきました。もちろん思い通りにいかない本人は怒りますが、残ったスタッフが関わりながら、本人の気持ちに寄り添い、折り合いをつけられるのを待つことで徐々にスタッフで仕事を選ぶことはなくなっていきました。

「仕事をしなきゃならない」という思いもあったのかも知れませんが、仕事をしなくても自分の存在は変わらないと安心して過ごせるようになったのではと思います。

② 旅行の担当になる

Kさんの楽しみにしている活動として一泊旅行の活動がありました。（特にホテルに泊まり部屋のカギを持つことを楽しみにしていることです。）

しかし楽しみにしすぎるあまり旅行の前後は飛び出しが増え、旅行当日も気持ちが高ぶりすぎて歯が痛くなったり、食事がのどを通らなかつたりと散々でした。旅行の計画の際には自分の気持ちが大きくなり、旅行の話が誰かが発する度に「ホテルホテル」と横やりをいれ「Kさんがいたら話が進まない」と言われて、飛び出す場面もありました。その時は本人の気持ちを受け止めつつ「話し合いは自分の意見を伝えるだけでなく、他の人の話も聞かないといけない」ことなどを伝えていきました。

そのため2015年の旅行の担当をKさん含むなかま達にしてもらうことになりました。Kさんも積極的に話し合いに参加し、飛び出し行為もほとんどありませんでした。

③ 蒐集（収集）行動

蒐集（収集）行動も多くあり、自宅からゴミ、靴下、軍手などを持ち込み自分のロッカーや空いているロッカーに詰め込むことがありました。生ゴミ等も一緒に入れてしまうので、においがしたり、虫がたまってしまったり。片付けをするとすぐに元の位置に戻したり、怒って飛び出しや暴れたりを繰り返していました。

困っていることを根気よく伝えていき、時には飛び出し行動や注意喚起行動をし、自宅から毎日ゴミを持っていくことは変わりませんが、徐々に自分で片付けが出来たり、ゴミ捨て場へ持っていくことが出来るようになってきました。

家族から実家から独立に本人、父親、妹と3人で暮らし始めたこともあり、家族関係の改善にも上記の軽減に繋がっていると考えます。

6. すこしづつ変わっていく

このように、ふとしたときに飛び出し行動にでてしまうKさんでしたが、変わっていく様子もありました。以前は自分の思い通りにいかないとすぐにスイッチが入ったように怒り、「問題行動」をとっていましたが、今は話を受け入れ「あーあ」と残念そうにしながらも折り合い

をつけるために心の中で葛藤する場面が増えてきました。（結果折り合いがつけられず飛び出しにつながる場面もありましたが）

7. まとめ

「問題行動」をしてしまうことだけに注目していくのではなく、「問題行動」の根もとにある本人の苦しみや悩みに目を向けていくことが大切なのではと感じています。

たくさんの失敗をしながら失敗の度にスタッフ間で会議を重ね、Kさんの「問題行動」に「どう向き合っていくか」を取り組みました。その結果安心して一緒に過ごせるなかま・スタッフが増えてきて「問題行動」を起こさなくてもいい自分や「大人な自分」に気づけたのではないのでしょうか。

現在でも飛び出し行動は時折ありますが以前のような衝動的な飛び出し行動も少なくなりました。また、注意喚起での飛び出し行動が長引くことはなくなりました。Kさんも「問題行動」をしたくて飛び出していたのではなく、きいて欲しい気持ち、わかってもらえない気持ちなどがあり「問題行動」をせざるを得ない状況だったのではと思うと、早く気づけなかったスタッフの力不足を感じますが、これからもKさんらしく過ごせるようにかかわっていきたいと思います。

なかまと働く中で、印象に残った出来事、大切にしたいと感じた事

私が麦の芽で働くようになってから1年が経ち、たくさんのなかまとの出会いがありました。去年の6月から、ワークプラザで創作班を担当させてもらっています。

創作班のなかまAさんは、麦の芽に来て、今年で3年目を迎えます。前に働いていた作業所では、主に木材のサンドペーパーがけを行っていたようで、「前の会社には17年間もいたんだよ！〇〇さんや△△さんもいたよ。」と、その作業所のことを笑顔で話す姿がみられます。ワークプラザの創作班では、プルーン入れや、企画販売の商品作り、乾燥糸こんにゃくのシール貼り、作品づくりなどを行っています。

Aさんは物を袋に入れたりする作業は好きなようですが、話し合いなどで自分の意見を出すことが苦手な様子です。また、自分の思いを表現することも難しいようです。誕生会の係も担っているAさんですが、「今日は誕生会の話し合いをしますよ」とスタッフから声をかけられると、「なんか気分が悪くなってきた…」と言われることがしばしばあります。メッセージ書きやコメント書きを行うときも、なかなか言葉が思い浮かばないようですが、スタッフと一緒に考えることで言葉が出てきます。

しかし、異動することになったスタッフの送別会のときに、そのスタッフの前でメッセージを言う機会がありました。Aさんの順番になると、「‘身体に気をつけてお仕事を頑張ってください’」って言えばいいのかな？」と、その場ですぐに考え、話している姿がとても印象的でした。周りのなかまやスタッフからも「おーっ」「すごい」といった言葉が出ていました。

それから送迎時に、「ねえ〇〇さん、ちょっと喉が渴いた。コンビニに寄らせてもらおうかな？」と言うこともありました(もちろん「送迎中は寄ることはできません」と伝えましたが…)。

自分の気持ちを言葉で表現することが苦手だったAさんでしたが、少しずつ自分の思いを表現できるようになってきているのだなと感じました。

私が今後大切にしていきたいことは、なかまのこのような変化を見逃さないということです。変化を見逃すことは、そのなかまが持っている可能性を潰すことになると思います。見逃さず、共に喜び合うことで、「自分にはできるんだ」と自信を持つことにつながり、そのなかま自身の新たな可能性につながっていくのではないかと思います。